事　　項	大豆のべと病の時期別の発生程度からみた健全粒の減収尺度
ねらい	大豆の主要品種「おおすず」で最も発生の多い病害であるべと病を対象に、発生時期・程度と収量との関係を検討した。その結果、開花期から約２週間後と約３週間後の発生程度によって、健全粒の減収尺度が明らかとなったので参考に供する。

指導参考内容

1　開花期から約２～３週間後に、べと病の葉での発生程度が低いほど健全粒の減収量は少なくなる。この時期の発生程度をなるべく低く抑えるためには、健全粒の播種によって初発後～開花期頃までの発生を抑制すること、べと病粒の形成を低減させる目的を兼ねてこの時期に薬剤散布を１回行うこと、が有効である。

2　株内全展開葉における時期別のべと病の発生程度と健全粒の減収尺度

発生程度（発病度）		健全粒（整粒7.9mm以上）の子実重でみた減収量
開花期から約２週間後	開花期から約３週間後	
1	10	３％
12	21	５％
23	31	７％
40	47	10％
51	57	12％

3　調査手順

(1)　２～３株について、１株当たりの全展開葉数を数え、調査時のおおよその葉数を把握する。
(2)　１圃場当たり２か所を任意に選ぶ。
(3)　１か所当たり20株について、下記基準により株毎の発生程度を調査し（例：40葉中、病斑面積が２葉分に相当すれば病斑面積５％）、発病度を算出する。
(4)　２か所平均の発病度から減収量を推定する。

【株毎の発生程度別基準と発病度の算出法】

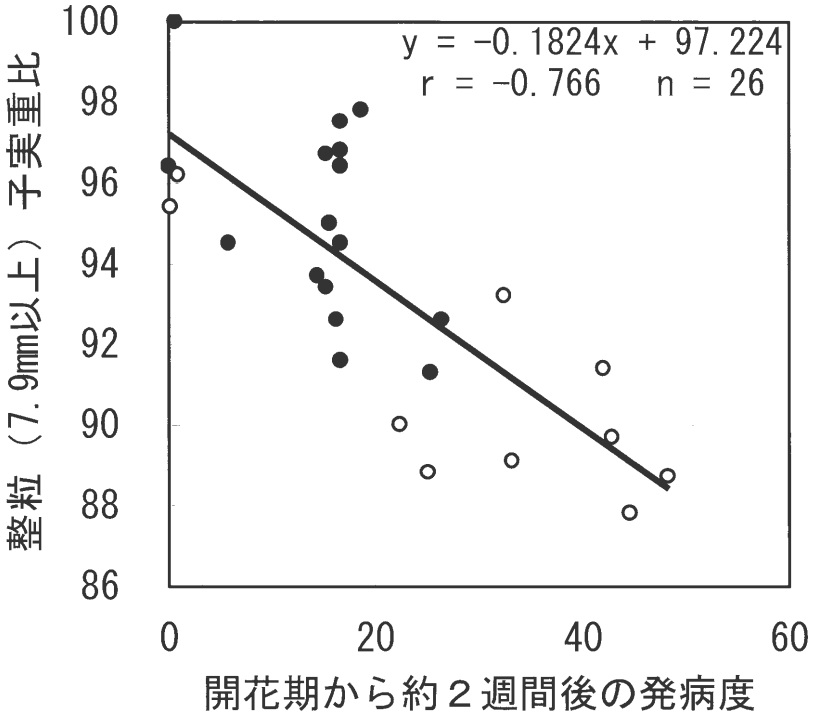
指数　０　：発病を認めない
指数0.１　：株内の病斑数が１～数個
指数　１　：病斑面積が株内全展開葉面積の５％以下
指数　２　：同６～10％
指数　３　：同11～25％
指数　４　：同26～50％
指数　５　：同51～75％
指数　６　：同76％以上

$$発病度＝\frac{\Sigma（発生程度別株数×指数）×100}{調査株数×６}$$

期待される効果	大豆のべと病による減収を軽減し、安定生産に寄与する。
利用上の注意事項	**1　本資料は平成21年３月２日現在の農薬登録に基づいて作成した。** **2　農薬を使用する場合は、必ず最新の「農薬登録情報」(http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/)を確認すること。** 3　本資料の減収尺度は健全粒のみを対象に示しており、べと病粒の選別除去による減収量を含んでいない。なお、無防除では、べと病粒の形成が粒重率で15％に達する事例もある。

担当部署（担当者名）	青森県農林総合研究センター　病害虫防除室（岩間俊太）	対象地域	県下全域
発表文献等	平成18～19年度　青森県農林総合研究センター試験成績概要集 平成20年度　普及する技術・指導参考資料		

【根拠となった主要な試験結果】



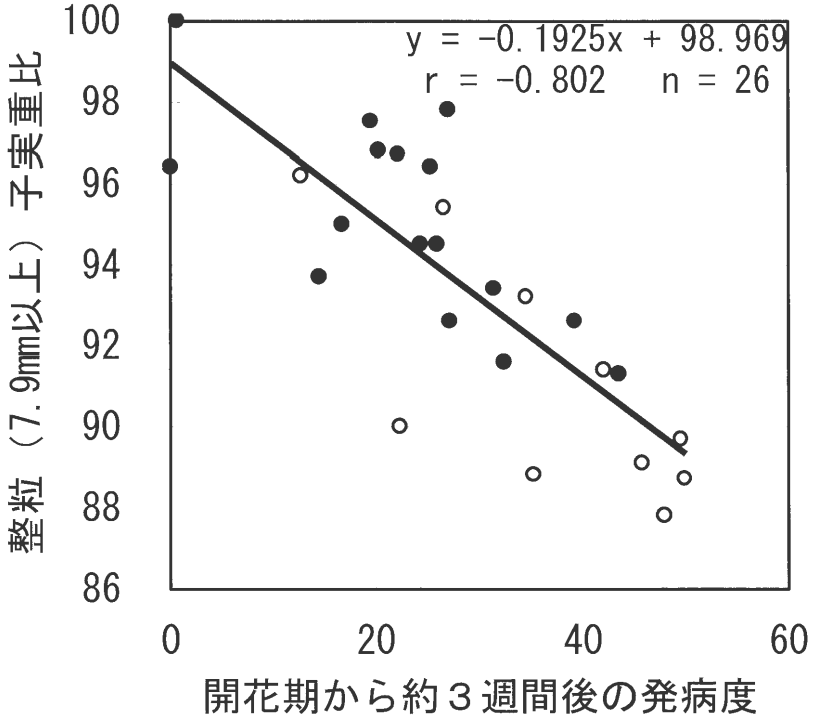


図１　大豆のべと病の発生程度と収量との関係（平成18～19年　青森農林総研）

（注）試験場所：青森農林総研田中圃場　品種：おおすず
播種日・開花期：平成18年６月12日・８月５日、平成19年６月６日・７月30日
○：平成18年データ　●：平成19年データ